

いもう 葦毛通信



平成 30 年 3 月 27 日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町 3 丁目 1
TEL : 0532-56-6060

No. 63

ニオイタチツボスミレ

1、バックホーによる作業－5(O・X・Y地点)

O地点とX・Y地点の間の水路は直線的に伸びています。右写真は前号で報告した反対側から見たところです。右上写真は木の抜根作業前で多くの部分がコシダやネザサの根の層で覆われているのが分かります。木を伐る前は水路も見通しがきかず、周りの地形もよくわかりませんでした。

しかし、木を伐ることにより明るくなり、また雨にたたかれることにより、水路に溜まっていた葉が流されたのか、流れる水の量が多くなったように見えました(右上写真)。そして、木を伐った直後から、アオサギが頻繁に訪れるようになりました。魚を狙っているようで、水路沿いを歩き回



O地点南東部作業前 (2018年2月18日：南東から)



O地点南東部作業後 (2018年3月10日：南東から)

っていました(左写真)。

バックホーによる抜根作業直後は地表面に第2層の黒色土層が目立つ状態でしたが、地表面が何回か雨にたたかれることにより第3層の礫が目立つようになりました(上写真)。水路より左側はわずかに傾斜し、水路に向かって中央から右に低くなっています。



O地点の水路のアオサギ
(2018年2月8日)

○地点南側は旧水田で、ヌマガヤが優勢の湿地でした。高くなって乾燥気味の畦にはイヌツゲが並んで見られ、旧水田面にはネザサが侵入して広がりつつありました。右上写真の左側にはイヌツゲが並び、中央部分左側ではネザサが優勢になっています。今回の作業ではヌマガヤが優勢な部分（右上写真手前右側）を残し、左側のネザサの根を除去しました。右下写真中央が根の層を剥いだところ。第2層の黒色土層が見えています。

旧水田部分は水分が多く湿っています。今後、多くの湿生植物が埋土種子から発芽してくると予想しています。

○地点中央部はI地点から流れ込んでくる水が小さな沢になって流れています。下左写真左側から右奥に向かって流れ、写真中央部で曲がって低くなっています。沢沿い



○地点南側作業前（2018年2月18日：南から）



○地点南側作業後（2018年3月10日：南から）



○地点中央部作業前（2018年2月18日） 作業後（2018年3月10日：南東から）

には湿生植物が、手前のやや乾燥したところには、その環境に適した植物が復活してくると予想しています。今年はバックホーによる作業を一の沢と○地点の2か所で大きく行うことができました。良好な湿地だった頃の土壌シードバンクを発掘し、埋土種子の発芽環境を整えることができたので、今後大きな変化が見られると思います。

2、2017年のナガバノイシモチソウ-2

1) 自生個体数の変化

2017年のナガバノイシモチソウは今年も個体数や開花数が順調に増えました。個体数は、毎年7月末日前後を基準日としていますが、9,233個体になり、今年も昨年の約2倍になりました。平成24年度に大規模植生回復作業を開始してから毎年、前年の約2倍になり、今年は**5年連続で平成23年度の約31倍**になりました。その後も個体数は順調に増え、8月31日には、10,341個体になりました。観察回数は85回で昨年よりもかなり増えました。

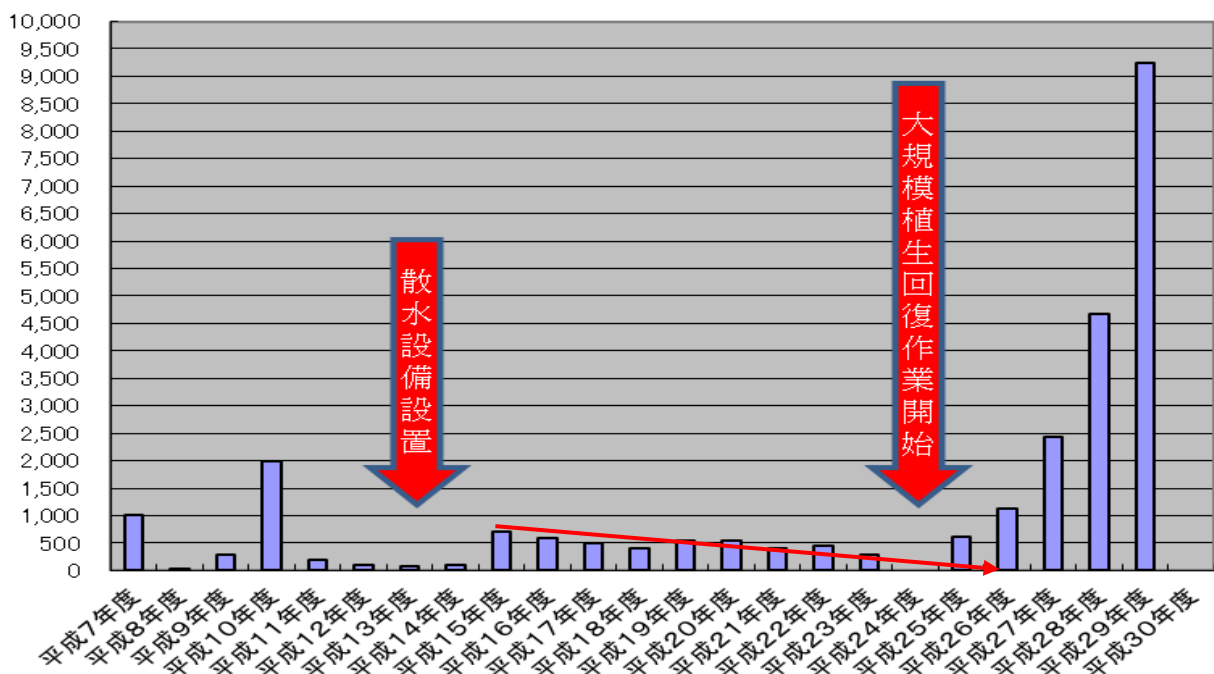
現時点で個体数の増加率は減少しておらず、今後も増加が継続と予想できます。しかし、いずれ増加率は徐々に減少して個体数は飽和状態になり、以後は増減を繰り返しながら推移すると思われます。また、指定地内全体の自生状況からは、最終的に自生数は少なくとも100倍(30,000個体)程度までは増加すると予想しています。

自生個体数、最高・平均開花数一覧

年 度	自生個体数	最高開花数	平均開花数
平成23年度	300個体	135輪	35輪
平成24年度	推定300個体	145輪	55輪
平成25年度	622個体	170輪	73輪
平成26年度	1,120個体	374輪	116輪
平成27年度	2,444個体	471輪	144輪
平成28年度	4,664個体	817輪	307輪
平成29年度	9,233個体	1,436輪	587輪

*平成24年度は自生個体数の記録なし

ナガバノイシモチソウ自生個体数の変化(基準日:7月末)



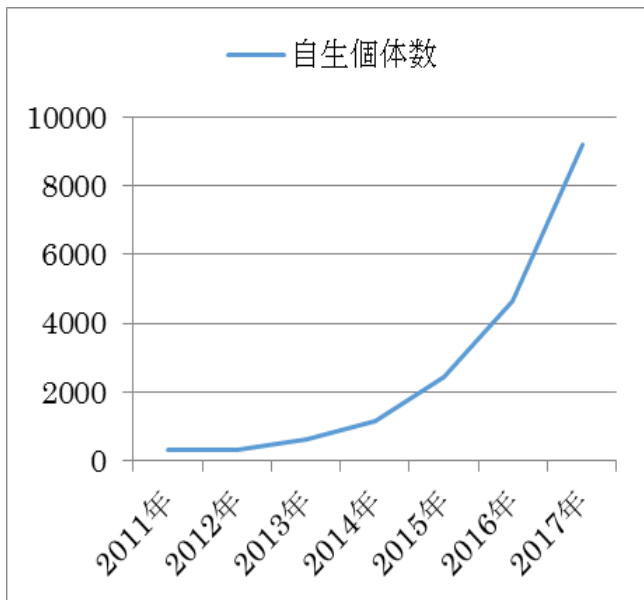
2) 開花数の変化

ナガバノイシモチソウは開花数も増加しています。しかし、その増加率は個体数の増加よりも低くなっています。大規模植生回復作業を開始した平成24年度には、最高開花数が

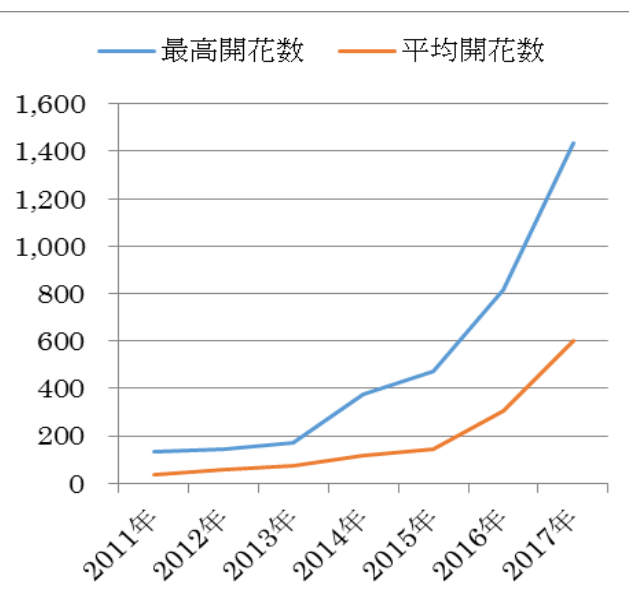
145 輪、平均開花数が 55 輪でしたが、平成 29 年度には最高開花数が 1,436 輪、平均開花数が 587 輪になり、ともに約 10 倍に増加しています。各年の増加率は、最高開花数が 1.17～2.2 倍、平均開花数が 1.24～2.13 倍であり、ややばらつきがみられますが、同程度です。

自生個体数は 5 年で約 30 倍になりましたが、開花数は約 10 倍になり、両者には約 3 倍の開きが見られます。これが何に起因するものであるかは現時点では不明であり、今後検討すべき課題であると考えています。

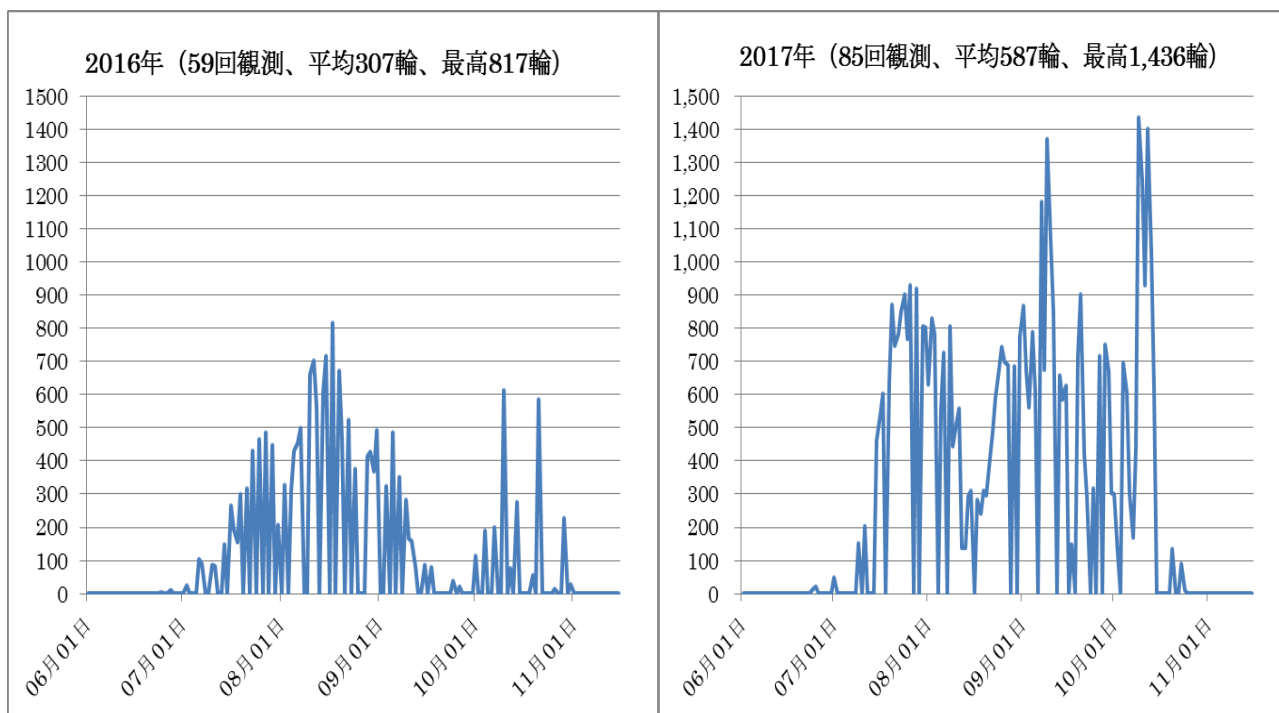
自生個体数の変化



最高・平均開花数の変化



2016・2017年日別開花数



各年の日別開花数は一定ではなく、ピークがいくつも現れるという同様の傾向を示しています。しかし、そのピークの出現時期や回数は各年によって異なります（葦毛通信 No.30・44・55 参照）。今後、個体数の増加とともにピークの出現が減り、全体的に平均化されてテーブルマウンテンのような台形になるのか、それともこのまま多くのピークが出現しながら推移するのか、注意して観察を続けたいと思います。2012年7月29日の観察会では開花数がゼロでしたが、もう、このような心配をしなくても良いようになりました。